



戦国大名となった家康公

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝



大樹寺山門。松平家、徳川將軍家の菩提寺。文明7年(1475)、松平家四代親忠により勢嘗愚底上人が開山。松平家八代の墓、歴代將軍の等身大の位牌、家康公73歳の時の木像などを祀る。(写真提供:岡崎市)

今川家抱えの若き武将としてスタートを切った家康公の立場が急変したのが、あの桶狭間の戦いです。今川軍の最先鋒として大名城への敵前兵糧補給という難しい作戦を成功させ、織田方の丸根の砦を攻め落とした時に、その横を反対方向に駆け抜けた信長が桶狭間の奇襲で義元を打ち破りました。

岡崎城に詰めていた今川勢は義元討死の報に接して城を捨てて駿河に引き上げ、家康公は一日形勢を見てから空城となっていた岡崎城に入りました。永禄三年(二五六〇)、家康公十九歳のことです。

この時、岡崎で織田軍と遭遇し、一時は極めて危険な状況となつて、家康公は松平家の菩提寺である大樹寺に入つて難を逃れませんが、そこで大樹寺住職の登譽上

人から、これからの戦は万民に平和をもたらしうものでなければならぬ、と諭されます。

これ以降、家康公の旗印は「厭離穢土欣求浄土」となりました。なんとも抹香臭い旗印ですが、このあたりで家康公の性格、考え方が少しずつ固まり、平和な時代にしないと人々は幸せにならないという気持ちが強くなつたのではないのでしょうか。

家康公の生き方を見ると、聖徳太子の「和をもつて貴しとなす」という言葉が蘇ります。戦国時代末期に成長し、母と別れ、父を失い、人質経験を経て、青年期から壮年期に幾多の戦争を生き抜き、晩年の関ヶ原から大坂の陣の頃には、もう戦国の時代に戻さない、平和な時代を築くという強い御意志があったと思います。この家康公の平和への強い願望は、そ

の後二六五年にわたつて引き継がれていきました。

岡崎で独立を果たして一年後に信長と和睦し、その翌年の永禄五年(二五六二)、祖父以来三代にわたつて続いた今川との関係を絶つて、家康公は信長と同盟を結びます。家康公が二十一歳の時でした。

この織田・徳川(松平)連合は天正十年(二五八二)、信長が本能寺の変で倒れるまでの二十年間、少しも揺るぐことなく続きます。家康公の特徴の一つは、一生を通じて大変に信に厚いこと、別の言い方をすれば誠に律儀なことでした。

永禄九年(二五六六)、二十五歳の家康公は朝廷に願つて姓を松平から徳川に戻す勅許をいただき、徳川家康となりました。新しい戦国大名として自立を宣言したこのことになりました。